



■ 第4回 SPARC Japan セミナー 2015 「研究振興の文脈における大学図書館の機能」

2016年3月9日(水) ベルサール神保町アネックス ホールA 参加者:161名

企画にあたって

執筆：蔵川 圭 (国立情報学研究所)

この企画は、一人の大学図書館員の実務に基づいて設計されている。実務に基づいているがゆえに、個別的な経験から噴出する様々な具体的問題をどのように解決していけば良いのか、指針を与えるテーマ設定となっている。その内容は、しかしながら実用志向にありがちなノウハウの共有ではなく、具体的な行動を促す理念の共有を目指したものとなっている。個々の業務担当の知識の伝承というより、そういった知識の一般化を行って、コミュニティの原動力としたいという意思の表れである。セミナーの趣旨文は、多くの大学図書館員の参加を想定し、こう訴求する。「我々大学図書館は、オープンアクセスやオープンサイエンスを単なる外来の概念として咀嚼、整理するということではなく、本セミナーでの話題提供を通して、日本における研究振興という文脈のなかで、次代の日本の研究支援の方策を具体的に構想しながら考えてみたい。」

SPARC Japan は、2003 年以来一貫して学術知識のオープンアクセスを主張してきた。2016年3月現在、オープンサイエンスという理念がこの業界のメインストリームとして湧き出でようとしている。大学図書館はこういった時代的文脈の中にあってどこへ向かっていけば良いのか、この答えを探し出す仕組みがセミナープログラムとしてビルトインされている。図1は、原点となる「オープンアクセス」から昨今の話題へと繋がっていき、「大学図書館の機能」を構想するシナリオを示したものである。

このシナリオを演じることができる役者は、理念を正確に理解しそして実践してきた第一人者である必要がある。セミナーは見事に、その第一線の役者を講演者として揃えることとなる。セミナーのシナリオに役者を位置付けると図2に示すようだ。まさに、セミナー開催地の名称をとって「神保町の奇跡」というべき顔ぶれである。各役者(講演者)の演題を、合わせて以下に列挙する。

1. 尾城孝一(東京大学附属図書館), オープンアクセス推進と研究支援～大学図書館の新たなチャレンジ～
2. 引原隆士(京都大学図書館機構長), 研究支援としてオープンアクセスポリシー策定の意味するところ
3. 真子博(内閣府), オープンサイエンスの推進について
4. 有川節夫(前九州大学総長), 我が国の研究活動の振興に資する大学図書館の機能

各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160309.html>)

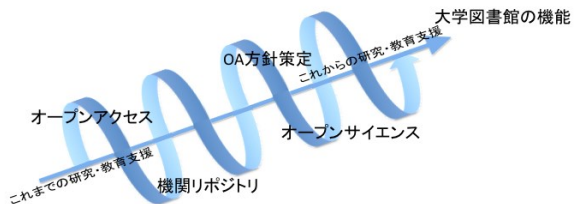


図1 セミナー開催趣旨の構造

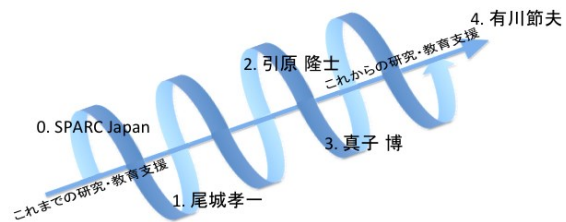


図2 セミナー登壇者の位置付け

講演

オープンアクセス推進と研究支援～大学図書館の新たなチャレンジ～

尾城 孝一（東京大学附属図書館）

これまでの大学図書館は、読み手としての研究者の支援を中心に活動してきたが、これからは、書き手とし



ての研究者の支援を加え、かつ、研究者のワークフローに入り込み、研究プロセス全体をサポートするよう、活動をシフトしていく必要がある。

研究支援としてオープンアクセスポリシー策定の意味するところ

引原 隆士（京都大学）



大学図書館の資料が資源から負債へとかわりつつある状況にあることを認識している。そのうえで、オープンアクセスという理念が、

研究者にとって、とくに何らかの外圧に対して、基礎研究を重視し、他者の研究プライオリティを尊重し、止揚する研究コミュニティの姿を守るために重要な方法を提供する可能性があることを認識する必要がある。オープンアクセスは、これからの研究者を育てるために重要であり、教員は自らの専門分野における論文を紹介し伝達する役割を担うことは大前提としたうえで、度量を持って後進を育てていかなければならない。このオープンアクセスという施策を進めるには、その意義を理解している人を増やすことである。いま流行りつつある、オープンデータ、オープンサイエンスの前にやるべきことがある。

オープンサイエンスの推進について

真子 博（内閣府）

オープンサイエンスは単なる輸入概念ではない。関係者・関係機関との検討が行われて共通認識をはかっているところである。本年の G7 茨城・つくば科学技術大臣会合では、オープンサイエンスを議題の1つとして議論する予定である。ぜひ大学図書館にはオープンサイエンスの推進を進めてもらいたい。

しかし、オープンアクセスやオープンサイエンスを推進するにあたって、学内に混沌とした状況があるが、これを打破するには、まず、図書館の機能を明確にしなければならない。研究部門とのジョイントも考えな



なければならない。大学図書館は、唯一研究・教育に関わる情報収集発信基地である。大学の執行部に明確にその立ち位置を決めてもらわなければならない。

我が国の研究活動の振興に資する大学図書館の機能

有川 節夫（九州大学）

大学図書館は、実はいろいろなところで進化している。法令・基準、答申・建議等をみると客観的に理解することができる。法令・基準では、1949年に制定、2004年に廃止となった国立学校設置法では、国立大学に附属図書館をおくということになっていた。1956年に制定された大学設置基準においては、図書館の設備について事細かく規定されていたが、91年に大綱化された。1952年に制定された大学基準協会の大学図書館基準では、図書館の要件が示されており、それは今でも変わらず影響力のあるものとなっている。答申・建議では、2006年3月の学術情報基盤作業部会において、学術情報基盤としてのコンピュータ・ネットワーク、大学図書館、情報発信



のあり方の3つについて議論された。その中には、財政基盤とかがかわる電子ジャーナルとの関係やオープンアクセス運動への対応としての機関リポジトリ、図書館サービスにおける主題知識、専門知識をもった図書館職員などについて取り上げられた。2010年の学術情報基盤作業部会では、大学図書館の機能・役割、大学図書館職員の育成と確保について議論された。学習支援と教育活動への「直接の関与」、職員の「育成」という言葉が出てきていることは着目すべきだろう。最近では、2015年の3月に内閣府における検討会で、オープンアクセスやオープンデータについて、新たに図書館や図書館員への機能や役割が見えてきていると思われる。

大学図書館は、伝統的な研究支援から、より直接的な貢献が期待されている。研究図書館機能の整備・充実、機関リポジトリによる研究成果の編集発行、リエゾン/サブジェクトライブラリアンとしての役割、研究戦略関係の部・課との連携、URAとの位置付けである。とくに、リエゾン/サブジェクトライブラリアンのことについて、一度、オープンアクセスやオープンサイエンスのコンテキストの中での新しい感覚の中で、現役の人は真剣に考えてみてはいかがだろうか。研究のアプローチとして歴史や比較については図書館員が行い、研究者は期待される現在の問題を解くというように先をやるようにすれば良いのではないか。

九州大学では、さらにその先のあり方として、共同研究する大学図書館像を描き、学内組織改編、整備を行ってきた。大学図書館の下に教材開発センターを置いたり、図書館同士の国際交流を実現させたりした。記録資料館や研究開発室を設置もしてきた。中でも、大学院統合新領域学府のなかにライブラリーサイエンス専攻をおき、大学図書館職員が時には学生になり時には教員になって活躍できるような体制も築いており、これは大学図書館員にとって魅力的に映っているようである。

このように、大学図書館の機能は、進化して、深化するものであり、組織もそれに合わせて変わるべきであろうと考えている。新しい図書館が現在建設中である。

パネルディスカッション

<どうすれば大学図書館が日本の研究力向上に寄与できるかを問う>

モデレーター：市古 みどり（慶應義塾大学）

パネリスト：尾城 孝一（東京大学附属図書館）／
引原 隆士（京都大学）／真子 博（内閣府）／
有川 節夫（九州大学）



図書館の役割や機能

引原氏：大学図書館をみていると、個人に能力があるのは認められながら、先が何も見えていない。

尾城氏：図書館員の持っている技術や経験が外に見えていない。研究者にとっては空気のように当たり前のものとなっており、アピールする必要がある。もっと越境していくような積極性も必要だろう。

真子氏：部長としての経験から、図書館員の個人の能力が認められる一方で、やはり越境ができない気質なのかもしれない。これは、外へ出ていけるようなシステムを作ったほうが良いと思う。また、図書館の中をどうのこうのではなく、大学なかでの図書館機能を議論すべきだ。

オープンサイエンスと図書館とのかかわり

有川氏：研究者にとって、研究データがオープンになることで、それが評価されるようになる。これはチャンスであろう。その流れの中で、図書館は、たとえばサブジェクトライブラリアンとのかかわりが見えると思う。データがオープンになるということのできる仕事があり、これは新しいサイエンスのやり方だ。

引原氏：オープンサイエンスは、進むところとそうでないところが、分野によってある。データの表現には方言があり、それがつながらないことは問題になるかもしれない。やる

べき必要のある分野からデータ接続の方向に進んでいくだろう。オープンデータを求めている分野は依然としてある。データ共有には、データの質保証も必要になってくる。

尾城氏:URA からみた図書館員の強みを聞いた時、情報の収集と保存、組織化だと指摘された。本や論文に対してその能力を発揮できることはよく分かるが、研究データは分野によって特性が違うので、よく考えて対処しないといけない。

有川氏:従来の図書館員の能力だけでなく、変わっていく必要がある。仕事としての取り掛かりはいろいろ考えられるので、その点は気楽に考えて取り組んでいくべきだろう。

データと基盤整備活動、研究者への義務付け

引原氏:研究の方法としてベンチマークモデルを共通化して、アルゴリズムを提案するという方法が従来からある。これからは、逆に、データを共通化して、モデルを介さずにアルゴリズムを提案していくという方法が進む。データが公開されることで生まれる技術が出るようになる。

真子氏:研究データに関して、出版界との共存関係を考えてもいい。世界の潮流もある。もっと研究者を守る議論が必要。また、上から規制していくというのは現実的ではないので、現場感のなかで議論が必要。

有川氏:研究不正というからみでデータが取り上げられるところがあるが、研究者が自分を守るためにエビデンスとしてオープンにするというのは自然な発想としてあると思う。研究環境に関しては、論文の独創性とは違って、いい考えがあればどんどん真似すれば良い。

引原氏:理論、数値計算、実験という3つの科学の手法があり、どれか2つが整合しなければ論文にならない。データの場合、科学的妥当性の保証が無い。だから、いろいろ実験をやって絨毯爆撃的に事象例を蓄える。それがデータを作って偶発的に現象発見につながり、あとから理論でおいかけられることも可能だ。こう言った考え方が広く主張されるようになったということ。

フロアから

フロア1:科学の時代の流れでは発見は誰のものかという帰属で競争するのが今であるが、データを公開することに意味を見出し、かつての神の知識を見出す時代のように文殊の知恵で発見をするというプロセスを認めるべきであろう。図書館とのからみでは、研究推進という意味で、オープンサイエンスにかなった環境整備を行うことが可能であり、少なくとも次世代の研究者へ影響を与えることはできるのではないかな。

真子氏:若い世代、次世代につなげるということは重要だ。研究者に対して、そういった考えで行動をしていって欲しいと思う。

引原氏:時代や世代に応じて学ぶ方法や内容は異なるものの、基本的に学ぶべきことはある。それを学ばせる環境は、いま不十分である。研究のように新しいことを組み込むときには、世間で追及される効率の要求ははずさないといけない。いろいろなステップがあることを認めることは重要だ。

フロア2:デジタル化と標準化について

引原氏:標準化については、日本の産業界は市場を抑えて標準化を狙ってきた。欧米はその前にルールを決める。だから市場を持たない日本がこのこと後から出向いては、一切標準化に関われない。だから、標準化の会議に最初から出ていく必要がある。そういった会議に教員を送ることを考えている。

全体を通して

「研究振興の文脈における大学図書館の機能」というテーマ設定は、とかく忘れがちなそもそもの大学図書館の本分を再確認するという重要な機能を果たした。本会合を通して、我々はいまもっとも話題となっているオープンサイエンスや研究データについて図書館がどのような役割を果たすべきか、ということについて議論する機会を得ることができたのではないだろうか。

-----参加者から-----

(大学/図書館関係)

- ・真子さんが以前国立大学図書館にいらした上で、今、内閣府でオープンサイエンスを扱われていることをとても心強く思いますし、また興味深かったです。G7 でトピックとなり、日本がリードする立場となること、見守りたいです。
- ・研究者側のお話と、政策を進める立場のお話と、異なる視点からのかかなり踏み込んだお話が聞けて、それぞれのお話の共通するところ・異なるところを考えるなかでオープンサイエンスとは、とか図書館がやるべきことは何かということが見えてきた気がします。
- ・このテーマのイベントとしては、違う次元(マネージメントレベル)からの話がきけて有益でした。

・現代における大学図書館の機能とは何であるか、明確な方向性が見つけられずに過ごしていました。講師の方々から方向性を示して頂き、少し整理ができました。職場に戻って、大学における図書館の機能について考えていきたいです。

(学協会/学術誌編集関係)

・直接業務に関わるものではなかったが、別の立場からの考えがきけて、今後のオープンアクセス・サイエンス方針検討の参考になった。

(企業/その他)

・過激な言い回しとあった分、本音というか、熱い思いが聞けて、腑に落ちました。

-----企画後記-----

☺ 図書館員の会議やシンポジウムの中で、研究者の激しい思いに触れるチャンスはそれほど多くありません。引原先生、有川先生、ありがとうございました。マイケル・ニールセンが唱えるように、「人類が抱える重大な問題解決への貢献」がオープンサイエンスであるならば、主役はあくまでも研究者ですが、陰ながら図書館員として関わりたいと強く思いました。しかし、科学コミュニティの価値観が変わるって並大抵なことではありませんよね！

市古 みどり (慶應義塾大学日吉メディアセンター)

☺ 多くの皆様に会場へお越しいただきましたこと、心より御礼申し上げます。本セミナーは、研究振興とオープンサイエンスをテーマとしながらも、講師の皆様より特定のトピックにとどまらない本質的なご指摘をいただき、図書館員そして社会に貢献する人間の在り方について、深く考える機会となりました。関係者の方々には、企画から開催に至るまでの確なご提案とご助言をいただき、誠にありがとうございました。

星子 奈美 (九州大学附属図書館)

☺ 今年度最後の SPARC Japan セミナーの企画を担当させて頂くことができ大変勉強になりました。セミナー自体もとても刺激的で、これからオープンサイエンスに向き合っていく大学図書館職員にとって、意味のあるセミナーになったのではないのでしょうか。今後とも、皆様との情報共有や連携によって少しでもオープンサイエンスを含む学術情報流通に貢献できればと考えます。ありがとうございました。

梶原 茂寿 (北海道大学附属図書館)

☺ 今回の企画は、おそらく、何か特殊な状況に見舞われた結果だと思う。私は、ここNIIの地で、10年の間に見てきた学術情報基盤と大学図書館にかかわる出来事を踏まえて、四方八方からどういった風が吹くのかを理解できるようになってきた気がしている。その、いま吹いている風を、星子さんという一人の大学図書館員に焦点を当て、どちらの方向に吹いているのかを分析することを試みた。その分析は瞬く間に、方々から洗われ、本来分散していた場のエネルギーがある一点に集中していく様子を見ることとなった。それは、神保町という地の、なせる技だったのかもしれない。

蔵川 圭 (国立情報学研究所)